

論文

## 黒板勝美とエスペラント

— 歴史家における「言語」と「民族」の発見 —

渡 邊 剛

キーワード

黒板勝美 エスペラント ナシヨナリズム

はじめに

近年、近代日本における史学史や歴史叙述に注目が集まっている。現在の歴史学の来歴を再考する系譜論的な視点にとどまらず、国民統合や植民地支配にそれらが果たした機能が問われているのであり、ここでは東京帝国大学を中心とするいわゆるアカデミズム史学の営為が大きなテーマとなっている。こうしたなか、アカデミズム史学の担い手として注目されているのが黒板勝美であり、国民統合や植

民地支配の担い手としての精力的な諸活動が明らかにされ、研究対象として脚光を浴びている。<sup>①</sup>

ところが、黒板にはこういった傾向に回収され得ない個性があるとすると認識も根強い。石井進が、黒板のナシヨナリスティックな側面を挙げる一方、『西遊二年欧米文明記』の〈開明〉性、エスペラントとの関係、社会主義者との交友を挙げ、黒板は単純な「忠君愛国の歴史家」ではなく、思想的に「矛盾した二つの顔」があったとするのは象徴的である。<sup>②</sup> 黒板を国民統合や植民地支配と関連付ける論者も

一定の留保を付ける場合が多いが、その際特に言及されるのがエスペラントとの関係性であり、「矛盾」とされる要素のなかで、とりわけ存在感を放っている。

しかし、逸話にもとづいて黒板の思想的「矛盾」を想定することには慎重になるべきで、それがアカデミズム史学の思想的検討にも影響を与えているのであればなおさらである。

エスペラントは、ポーランドのザメンホフが一八八七年に創案した国際共通語で、諸民族の言語を尊重し公平なコミュニケーションを実現することを目的とするものである。その反帝国主義・国際連帯的性格から社会主義的・革新的傾向があると見なされることが多いが、英語などの有力言語による他言語浸蝕を批判する性格からナシヨナリズムと結びつく場合もあり、近代日本も例外ではなかった<sup>4</sup>。実際、丸山二郎は、黒板のエスペラント論は「何れの国でも、自国語の外にエスペラント語一つだけを共通に知って居ればよい。日本人だけが英語も知り、独逸語も仏語も勉強するという事は間違っている以上に不便だ」という「国語の擁護論」でもあったと回想し、羽仁五郎も類似の回想を残している。若井敏明が羽仁の回想にもとづき、「ナシヨナリズムとインターナシヨナリズム」の「同居」を推測したことは注意されるが、あくまで回想にもとづく推測にと

どまる<sup>5</sup>。

黒板エスペラント論を具体的に取上げたのが、尹智煥、齋藤智志、ヨシカワ・リサである。尹は「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」（一九一五年）によるエスペラントのナシヨナリズムへの組込みを、齋藤は、各民族の言語尊重と公平な国際関係構築にエスペラントの意義を認める「エスペラントに対する感想」（一九二二年）と、各国民の性情に着目した『西遊二年欧米文明記』との関連性を指摘した<sup>6</sup>。両者ともエスペラント論とナシヨナリズムの関連性を指摘して前掲の回想を裏付けるが、対象がそれぞれ一論文にとどまる。

これに対し、ヨシカワ・リサは初めてまとめて黒板のエスペラント関係事蹟・エスペラント論を取上げた。既存の運動史などを用いて黒板が一九〇六年から一九一九年までエスペラント運動に関係したことを紹介したうえで、一九〇六年から一九一五年までのエスペラント論を取上げ、黒板が平和主義と反英米的ナシヨナリズムの観点からエスペラントに着眼した点、黒板が後者をより重視し、具体的にはエスペラントの言語的中立性と、エスペラントによる海外への日本史・日本文化普及を念頭に置いた点、一次大戦勃発後、黒板が反英米的ナシヨナリズムにもとづき英語の覇権性を強く批判した点を指摘した<sup>7</sup>。

とはいえ、ヨシカワに至る先行研究には課題がある。一点目は、運動史や回想に依拠し、<sup>14)</sup>同時代資料の悉皆調査・整理を行っていないことである。もともと詳細なヨシカワの研究も、事実関係はほぼ運動史などに依拠しており、この点は極力同時代資料にもとづき黒板の活動を把握する必要がある。また、黒板エスペラント論の下限は一九二二年であるが、ヨシカワが内容に踏み込んだその下限は「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」(一九一五年)である。総じてヨシカワは黒板の反英米的ナシヨナリズムの一貫性を強調するが、長期にわたるエスペラントとの関係のなかで論調の変化も考えられ、エスペラント論の悉皆的検討も望まれる。

二点目は、歴史家としての黒板の活動と、エスペラント運動との関係である。先行研究では齋藤、ヨシカワの指摘があるものの、総じてナシヨナリズムとの関係性に焦点が当てられている。歴史家の社会事業への関与はしばしばナシヨナリズム一般に回収されるが、そこから一歩進み、歴史家としての営為とエスペラントとの関係性を問うことが、歴史家黒板、そしてアカデミズム史学を理解していくうえで求められよう。

従って本稿では、一般財団法人日本エスペラント協会所蔵のエスペラント運動資料を活用し、黒板とエスペラント

史苑(第七九卷第二号)

の関係を復元整理するとともに、そのエスペラント論全体を検討し、黒板エスペラント論の性格、特に歴史家としての営為とエスペラント論との関係性を明らかにすることを目的とする。

## 一 黒板勝美とエスペラントの関係

まず、黒板とエスペラントの関係について三期に分けて整理する。

### 第1期…日本エスペラント協会の創立と幹事就任

(一九〇二—一九一〇年)

黒板がエスペラントを知ったのは、一九〇二年のことらしい。同年一月二六日付の郷里・長崎の英字新聞 *Nagasaki Press* に掲載されたエスペラント紹介記事を目にした黒板は、<sup>15)</sup>新聞社に問い合わせる学習書を取寄せ学習を開始したが、周囲に同好の士もいないことから根気が続かず、<sup>16)</sup>独習は中断された。

しばらく経って一九〇五年、フランス社会党のエスペラント導入を知った平民社の堺利彦が関心を抱き、黒板の口述にもとづき紹介記事を執筆した。<sup>17)</sup>これは社会主義者への広報にとどまったが、翌年五月、『読売新聞』に黒板の談話

が掲載され、エスペラントの存在が広く認知されるに至る。<sup>(15)</sup>

同談話において、黒板はエスペラント団体結成を示唆したが、各方面から賛意があがると同時に、岡山高等学校教員エドワード・ガントレットや、東京の出版社・有楽社の支配人・安孫子貞治郎が、既に独自の活動を開始していたことも明らかになった。意を強くした黒板は、安孫子、読売新聞社の薄井秀一と相談、改めて本格的団体結成を企図した。<sup>(16)</sup>

一九〇六年六月、協会設立の相談会が開かれた。集まったのは、黒板、安孫子、薄井、藤岡勝二、斯波貞吉、飯田雄太郎、浅田栄次、足立荒人、丸山通一、古賀千年の一〇名。ここで正式に日本エスペラント協会結成が決議され、規約や役員を選定、黒板は運営の中核を担う幹事に任命された。<sup>(17)</sup>

協会幹事となった黒板は、熱心にエスペラント運動を推進した。まず、協会事業の運営業務である。日常業務のほか、一九〇六年九月、七年一月に開催された協会大会に際してはそれぞれ準備委員、司会に任命された。<sup>(18)</sup>一九〇七年一月に協会東京支部が設立されると副会長となり、しばしば例会で講話を行った。<sup>(19)</sup>公務の出張を利用して関西方面の支部設立を協議、一九〇七年四月には京都支部創立式に出席して演説するなど、地方組織設立や拡大にも関与した。

エスペラントの意義を訴える講演や執筆は、黒板の重要な役割であった。協会行事のほか、文芸協会、大阪高等医学校、横浜基督教会館、成田山図書館などで講演を行った。<sup>(20)</sup>機関誌『日本エスペラント』に論説や翻訳を掲載したほか、外部の雑誌でもエスペラントを論じた。上村観光や富岡謙蔵といった知人にも勧誘を行い、田中光頭を名誉会員に迎える成果をあげた。<sup>(21)</sup>堺や平民社との交友もエスペラント普及に活かされている。<sup>(22)</sup>

エスペラント講習会の講師としての活動も見逃せない。東京・横浜両支部、三田で開催された講習会で指導したほか、一九〇七年三月から毎月二回、協会本部を置いていた有楽社の若手社員への講習を実施、山鹿泰治を指導した。<sup>(23)</sup>辞典編纂にも関係し、一九〇六年一〇月に安孫子・浅田と共にエス和辞典 *Esperanto-Japana Vortaro* を刊行、同書は黒板が休暇中一週間ばかりで書きあげたものという。<sup>(24)</sup>

こうした精力的活動を展開した黒板は、一九〇八年二月、洋行に出発した。その途次、同年八月にはドレスデンで開催された万国エスペラント大会に協会代表として出席、エスペラントの発明者・ザメンホフら各国のエスペラントイストと交歓、英米仏でもエスペラントイストと面会した。<sup>(25)</sup>黒板は不在中の協会資金を心配し、『国史の研究』初版（一九〇八年）を刊行してその印税を運動に充填したと

いう逸話が残るが、黒板自身はこの点に關し明言してはいない。<sup>(34)</sup>

## 第二期…日本エスぺラント協会幹事長として

(一九一〇～一九一九年)

一九一〇年二月、帰国した黒板を待っていたのは衰微した協会であった。運動史では、一時的流行の終焉、推進役黒板の不在、運動に参加した社会主義者に対する世間の警戒感が衰微の理由として挙げられている。黒板不在中、協会の組織会則、方針の変更が抑制されていたところをみると確かにその影響力がうかがえ、また協会の担い手の一人だった大杉栄が逮捕され、協会も警察の監視を受けるなど、状況の不利は間違いない。劣勢の中、黒板は「終始一貫」エスぺラント普及に尽力する。<sup>(35)</sup>

黒板は協会に幹事長の役職を新設し自ら就任、会計の責を負った。<sup>(36)</sup> 有楽社に間借りしていた協会事務所は一九一〇年一二月に黒板が借りた麹町内幸町の借家に移転、例会はここで開き、黒板は折々寄って事務をとった。<sup>(37)</sup> 一九一三年九月には家賃滞納で立退きとなったため、協会は原宿の黒板宅に移り、例会は東京物理学校で開催した。機関誌は一九一一年五月から黒板が編輯人となったが、一九一二、三年は休刊を余儀なくされた。

窮境の中、黒板は帰国の年八月に夏期休暇を利用し、広島、長府、鹿兒島、岡山など西日本各地を巡ってエスぺラントを宣伝、同志と連絡を取り、翌年にも遊説を行ったという。<sup>(38)</sup> しばらく目立った講演はないが、一九一三年六月には協会横須賀支部会主催講演会で中村精男とともに三〇〇名の聴衆に熱弁を振るうなど、頽勢の挽回につとめた。講習会についても、一九一〇年一二月には東京の芝分会で講師を務め、一九一二、三年頃には芝や協会事務所で指導したという。<sup>(39)</sup>

この時期の逸話として著名なのが警視庁と通信官吏養成所における講習である。<sup>(40)</sup> 前者について丸山二郎は、「庁内高級官吏がエス語智識の必要を感じ毎週水曜午後幹事長黒板博士を聘して熱心に研究した」もので、「内務当局」による大逆事件以後の「社会運動」への監視の一環であり、「安心してその教授に当つて欲しい人」として選ばれたのが黒板だったと伝えるが、小坂狷二による「当時警視庁の特高係員がエスぺラントに対して誤解を抱くのは自らやらないからだ」と庁内に講習会を開かせ自ら赴いたものとする回想も残る。<sup>(41)</sup> 後者は一九一二年の実施で、受講生が減つて一人になつても構わず出講する熱心ぶりであった。この時期には黒板の講習は戯画化されるに至る。<sup>(42)</sup>

一九一四年六月には黒板・中村精男・千布利雄共著、小

坂・杉山隆治補助『大成エスペラント和訳辞典』が刊行されたが、実際は小坂、杉山の筆になるらしい。<sup>(54)</sup>一九一五年一月から雑誌『中学世界』に黒板署名のエスペラント講座が連載されたが、これは千布の執筆だったらしく、同年三、四月に『太陽』に発表された黒板のもつとも著名なエスペラント論「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」も、「千布利雄氏の草案を基とし黒板博士自ら意見を加へ添削修正せられたるもの」だったという。<sup>(55)</sup>こうした名義利用について小坂は、「何しろ世間ではエスペラントといえは黒板博士、黒板博士といえはエスペラントと心得ていた」故と回想する。<sup>(56)</sup>

黒板ら運動家の努力と社会情勢があいまって、次第にエスペラント運動は復興を迎える。黒板洋行後に開催しなくなっていた協会大会は一九一六年から復活、黒板は毎年参加、講演を行ったほか、各地で弁舌を振るった。<sup>(57)</sup>一九一五年一月の東京帝国大学エスペラント会結成に際しては相談役に就任している。<sup>(58)</sup>

当時の協会財政は黒板の私財によって賄われていたとい、協会会計と黒板家の家計の混淆による不明瞭さには不満の声があがっていたらしい。<sup>(59)</sup>実際、機関誌では「協会の欠損に対し黒板幹事長が毎月多大の補助をされる」点が特筆され、『実業之日本』では「俸給の一部を割いて自ら雑

誌まで発行して居るが、金のない時は休刊して、金が出来れば又発行を続けると云ふ有様だ」とも報じられている。<sup>(60)</sup>大正期には次第に若手活動家が運営を担うようになったものの、一九一八年に至っても高等学校受験を控えた黒板の子息・庚一が雑誌発送や会計などの会務を担う有様で、家族経営の色彩が濃厚であった。

あわせて、黒板は次第に運動の第一線から疎遠になっていった。小坂は、元来の多忙に聖徳太子奉賛事業が加わったことを理由に挙げる。一九二一年の太子一千三百年忌法要に向けて太子の事蹟を宣揚するため、黒板らは一九一五、六年頃から各方面に働きかけ、一九一八年に聖徳太子一千三百年御忌奉賛会を結成、黒板は理事となつてその中核を担った。丸山が「大正五六年頃から漸くその第一線から退かれたようである」とするのは、おそらくこの事業と関連しているよう。これに伴い、運動を担う浅井恵倫などの若手運動家との感情的齟齬も重なっていった。<sup>(61)</sup>

### 第三期：「学会革命」とその後（一九一九年～）

一九一九年七月、支払遅滞による印刷業者とのトラブル、それに伴う雑誌の発行遅延が発生した。

これをきっかけに、運動復興の時勢に適した協会運営が企図された。具体的には独裁的な幹事長職廃止、幹事によ

る会計管理などであったが、一月の例会で黒板は幹事長職廃止を了承したものの、会計権限の移譲は拒否したという。改革が膠着状態に陥るなか、黒板排除の動きが運動家間で加速していった。

二月二〇日、協会の臨時総会が開催された。黒板は所用で欠席であった。小坂は協会を存置したまま新運動団体・日本エスペラント学会を設立し、以後実務はこちらで行うことを提案した。一時は紛糾したものの、従来の諸問題が明らかにされたことで最終的には提案が満場一致で可決された。

翌日の『読売新聞』は、「多年横暴」「万事独断的」な黒板に憤慨した幹部による新団体結成を報じ、小坂の「此の問題は黒板博士が余りに専制的に会計を取扱つて幹事に干渉せしめない為に会が萎微するに基因してゐる。吾々は何度か同博士に会計の公開を迫つたが駄目だった」という談話を掲載した。

報道の翌日、黒板は電話で小坂を呼び出し、翌二三日に小坂は浅井同伴で黒板宅を訪問した。黒板は当初反発したというが、小坂が運動のためのやむを得ない措置であると弁解、黒板もついに諒解し「正月はまた揃つて遊びに来たまえ」と見送つたという。この一件を小坂は後年「学会革命」と呼んだ。

こうして黒板はエスペラント運動の中枢から排除されたが、エスペラントへの好意を絶やすことはなかった。

まず役職をみれば、一九二〇年一〇月の大会で学会評議員、一九二二年に結成された東京学生エスペラント連盟では会長に就任、一九二六年には学会の財団法人化に伴い理事となった。一九三六年に結成されたエスペラント運動後援会では発起人となり、一九三九年には学会顧問に就任している。

具体的な活動についてみれば、一九二〇年大会では従来とかわらず講演、一九二三年八〇九月に岡山で開催された大会にも出席、大会の名譽会頭に推されて挨拶をしている。一九二二年二月には学校教育でのエスペラント採用に関する帝国議會への請願に名を連ね、一九二六年一〇月には英語のみ會議用語に選定した汎太平洋學術會議に対してエスペラントを會議用語とすべきとする意見書に名を連ねた。

丸山二郎によれば、一九三〇〜三一年頃になつても学会の人間は黒板を訪問し、重要問題に対する助言や協力を求めていたというが、そのような時に黒板は、「大分エスペラントとも遠くなつたね。今僕が出るのもねい」と笑つていたという。一九三七年一月の大会では、「エスペラント運動功労者」としてメダルを贈呈された。

黒板の没後、学会機関誌に掲載された小坂の追悼文は、エスペラント運動の「生みの親たる先生」と黒板をたたえている。<sup>(87)</sup>

## 二 黒板勝美のエスペラント論

以上、黒板とエスペラントとのかかわりを復元整理した。前述の長期にわたるエスペラントとの関係を前提として、黒板エスペラント論の内容、そして歴史家黒板の嘗為とエスペラントの関係性を検討する。

管見では、黒板エスペラント論は概ね二期に分けて理解することが可能である。

### 第一期…対外交流と海外の日本研究への着目

（一九〇六～一九〇八年）

一九〇二年に最初にエスペラントと出会った時、黒板が何故関心を持ったのかは不明である。一九二二年には、日本人の外国語学習の困難に対する解決手段、その中立性による「自国語尊重」の可能、そして「殊に専門として余が研究しつゝある日本歴史の教訓」などからエスペラントを評価したと回想している。「教訓」の具体的内容は明示されていないが、全体の論旨から「我が国民が昔から言霊の

さきはふ国と称して居る」という「自国語尊重」的「国民精神」を指すとみられる。とはいえあくまで後年の回想で、留保が必要である。

一九〇六年から一九〇八年にかけて発表された黒板エスペラント論は、次のようにまとめられる。黒板は同時代を、交通機関の発達などにより各国間の交渉・交流が緊密化した「一つの団体」のような時代と認識する。<sup>(88)</sup>しかし、外国語学習の負担や、言語の相違による不和といった「言語の相違より生ずる損害」は全世界的なものであり、日本においては外国語教育の負担の割には効果があがらない現実がある。<sup>(89)</sup>そこに登場したのがエスペラントであり、人工言語ゆえの簡易性によって、学習の負担は他外国語に比べて圧倒的に軽減され、特定の国家・民族に属さない中立性によって、各国・各民族のナショナルリズムの衝突を回避することも出来る。エスペラントの導入は、「世界人類の平和と幸福」に貢献するといっているのである。<sup>(90)</sup>

この時期のエスペラント論は、以後に黒板が言及する論点をおおむね網羅しているが、この時期の論調で特に注意すべき点を挙げておきたい。

まず、英語に対する態度である。「自国語尊重」という観点にもとづくナショナルスティックなエスペラント理解がこの時期から存在することは、ヨシカワが既に指摘して



いる。<sup>⑤</sup>初期の日本エスペラント運動には日露戦後の（一等国）意識にもとづく国際化の予測があり、エスペラントとナシヨナリズムの結びつきは、黒板として例外ではなかった。黒板がエスペラントと同時代の国家的価値が何ら矛盾しないと捉えていたことは、教育勅語のエスペラント語訳を機関誌に掲載した事実が傍証している。<sup>⑥</sup>

しかし、この時期の黒板は一般論として中立性の意義を語る向きが強く、英語の流布などへの反発に言及しつつも、反発主体として日本が明確に意識されていない。日英同盟成功の基礎は日本における英語教育の発達に一因があると述べて言語による融和の一例とするなど、<sup>⑦</sup>後年とは著しく趣を異にしている。「自国語尊重」への着眼は、この時期は未だ強くなかったのである。

また、「標準語」に関する言及も見逃せない。黒板は文部省の「標準語」政策を、「九州の人が奥州の人に逢つた時に両方通じない不便を救ふ為」で、「地方語」は「強ひて之を根本的に改める必要はない」として、エスペラントとの構造的同一性を説く。<sup>⑧</sup>同時代の「標準語」論の理解としては心もとないが、「地方語」存置派であったことは分り、この点も後年と相違する。

こうしてみると、一九二二年の回想で述べられた「自国語尊重」的観点にもとづくエスペラントへの着目というの

は多分に後年の脚色で、当時の黒板は簡易性により重きを置いていたと評し得る。社会主義者のエスペラント運動参加は、外国の労働運動との連携など対外交流に有効なツールとしての着眼ゆえであるが、少なくとも同時期の黒板も対外交流重視の見解を示していた以上、彼らとの連携はさほど違和感がなかったとみられる。

さて、歴史家黒板の営為とエスペラント論は、どのような関係であったのだろうか。この点に関しては、エスペラントによる海外への日本史・日本文化普及の企図をヨシカワが指摘しているが、同時に海外・西洋人の日本研究への評価と対抗意識もあつた。<sup>⑨</sup>黒板は、日本人が世界に研究を發表することが少なく、「寧ろ西洋人が日本のことを研究して、世界に紹介すると云ふやうな奇観」を呈しており、エスペラントはこの状況の改善に資すると思つたのが、その普及を志した「第一の動機」だと述べている。<sup>⑩</sup>『国史の研究』初版の第五章「神代の研究」において、「小愛国熱」「尚古論者」を原因とする研究の不振を嘆きつつ、「この自由討究は却つて我が国の学者よりも外国人が忌憚なく行ひ得るといふ有様」と似た調子の発言をしているのを見ると、黒板の念頭には神話研究があつたとみられる。黒板は大学院在学中「神代史」「上代史」研究の必要性を高唱、一八九九年の「スサノヲ論争」以後の近代的な神話研究の

胎動のなか、神話関係の論文を発表しつつあり、マックス・ミューラー流の神話学書を閲覽していたようである。西洋古文書学の分類法など、自己の専攻する古文書学における外国の学問の受容なども、エスペラントの有用性への認識を助けたであろう。内容に直接的関係はないものの、『国史の研究』初版の第二章「補助学科及びその参考書」の補助学科の先頭に言語学が置かれているのは、おそらく黒板の「言語」への関心と関連しているとみてよい。

なお、この時期の黒板および協会は国字改良、特にローマ字国字論に賛同し、ローマ字導入に際してのエスペラント式綴方導入を提案していた。国字改良への賛意は一九一三年までみられるが、これはローマ字化によって「外国人が日本の書物を見る」場合の利便性への配慮があり、こういった主張が前述の対外交流、外国の日本研究への態度と関連していることはいうまでもない。

## 第Ⅱ期「言語」と「民族」の発見（一九一〇～一九二三年）

帰国の年、その翌年に発表された黒板のエスペラント論は、欧州において見聞した言語対立への言及が加わったものも現われたものの、論調に変化がみられたとはいえない。それが見られるのは一九一三年六月の講演「海員とエスペラント」からである。

黒板は同講演で国際関係の緊密化を説くと同時に、日本が「外国文明の移植」の段階を脱して採長補短を実践する必要を説く。そのうえで、世界における「自分の国を愛する精神」にもとづく「本国の言葉」尊重の潮流を紹介し、「愛国的精神を助長さし国民的団結力を増加させてゆくには益々自国語を奨励せねばなりません、一方に国の文明を發展さすには益々外国との交際を密にしてゆかねばな」という「一大矛盾」状況の解決のため、「自国語を尊重すると同時に国際語を併用する」、すなわちエスペラントを採用する他なく、それによって「国民間の意思疎通」、ひいては「世界の平和」に貢献することが出来ると述べた。

このような論法の発展型が、一九一五年三、四月発表の「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」である。前述の通り同論文は千布執筆、黒板添削というが、内容を確認すると従来の黒板の主張や見聞の集大成であり、従来の黒板の論を千布が整理したとみられる。

同論文は「民族」「国民」団結の要素として「血族関係」「言語」を挙げ、言語は国民統合や植民地支配、国力の程度を図る要素であり、現代は西洋圏のみならず、日露戦争によって「人種的自覚」を喚起された非西洋圏でも「民族主義」が発生、その要素たる「言語」が重要な争点となっているとする。日本語は言語学的に欧米語に劣らぬばかり

か、人口増殖、領土拡張によって使用範囲が拡大され、「大國語の仲間入」が出来る域に達しているが、現在の日本では「外国語崇拜」が横行、英語が濫用される嘆かわしい事態を招いている。さりとて国際関係、技術・学問の発展のために外国語学習は必須であるが、日本語と欧米語は差が大きく学習は容易ではないため、中立的で簡易な 에스ペラントが有効であるというのであった。

このように、一九一三年から一九一五年にかけて、ナシヨナリスティックな 에스ペラント論が確立したのである。具体的な英語批判の出現に加え、〈方言〉に関しても論調が変化、一九〇六年に「強ひて改める必要がない」と述べていたのが、一九一五年には「日本語も既に多数の方言に分裂してゐるから、之を統一すると云ふことは最も急務」と述べるに至っている。

こういった論調の転換の背景として、まず考えられるのが洋行体験である。

黒板は洋行によって欧米に学ぶべき点が多いことを再確認しており、それは学問分野にも及んだ。「海員と 에스ペラント」では、「日本歴史中の一小範圍」の研究においてすら「外国の事柄に通じて之を利用することが最必用」と述べている。黒板はその具体的内容を明言しないが、欧米の文書館や博物館、史蹟保存関係の施策、考古学的調査へ

の注目は既に指摘されており、古文書学関係では、欧州の敦煌文書・美術品研究を帰国後に日本の学界に紹介している。こうした体験が従来からの対外交流志向を継続、強化したといえよう。一九一二年に結成された東京帝大の西洋史教官を中心とした研究会・読史会への参加は、こうした志向の一つの現われといえる。

こうした着目の背後にナシヨナリズムや植民地主義があったことは既に指摘されているが、これと関連して各国各地における「国語」尊重の動向への着眼があった。洋行中、黒板はオーストリアハンガリー帝国におけるドイツ語とマジャール語の対立、エジプトにおける英語とアラビア語の対立、トルコにおける諸言語の対立状況などを目の当たりにしている。この洋行で国家・民族の独立、一体性や国力と〈国語〉尊重の関連性を強く認識したことは疑いなく、この時の見聞が「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」などに生かされた。

しかし、『西遊二年欧米文明記』（一九一一年）に代表されるナシヨナリスティックな洋行談の出現と比較して、一九一三年に至るまでその論調に変化がみられないことには、単に論理の再構成に時間を要したというのではない、他の要因をも想定する必要がある。

この点、注意すべきは一九一〇年から一一年にかけての

大逆事件である。エスペラント運動への社会主義者の参画は世間の警戒感を生んだが、大逆事件はこの流れを決定的にした。ヨシカワは丸山の回想に依拠し、警視庁への出講を社会主義者対策、「反リベラル体制への協力」とする。しかし、小坂の回想や当時の運動が置かれていた状況を勘案すればこの評価は一面的に過ぎよう。黒板にとっては、エスペラント運動は社会主義運動とは異なり、同時代の国家的価値と何ら対立するものではないことを積極的に示す必要がある、それは黒板にとつて誇張や隠蔽ではなかった。その意味で、警視庁への出講は得難い好機であつたらう。

また、ナシヨナリスティックなエスペラント論の確立には追い風が吹いていた。ヨシカワは、一次大戦開戦によつて生じた日本知識人の欧米に対する懐疑的傾向と黒板の英語批判を関連づけるが、第一次世界大戦における「民族主義」の高揚も黒板のエスペラント論の変化を支えている。一九一〇年代に英語（教育）批判が拡大、一九一六年には大岡育造による中学校における英語教育全廃論が登場しており、一九一五年には遠藤吉三郎が日本における英語の流通を「英領」的と批判した。黒板は「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」において遠藤論文を評価、その論法を利用しており、当時エスペラント界で活躍していた「英語亡国」が持論の高橋邦太郎も遠藤論文や黒板論文に呼応、

黒板もまた高橋を評価しつつ、「外国語崇拜」一掃を求めた。

このようにみると、洋行と大逆事件という二大事件、そして同時代の状況を背景として、一九一三年から一九一五年にかけての変化が起こつたとみられよう。

さて、このような論調の転換にもなつて、歴史家黒板に新たな動向が生まれた。すなわち、「言語」とそれが支える「民族」への着目である。

この意味で、一九〇八年刊行の初版を増補改訂した一九一三年刊行の『国史の研究』総説の部における第六章「国号と民族」の新設は目を引く。同章の「民族」部分は初版でも紹介されていた民族起源論の整理であるが、同章の「我が国史が国民そのものゝ歴史でなければならぬ」、あるいは第五章「国史の範囲」における「我が国史は我が国土の歴史ではない、我々日本国民の歴史である。我が国の領有にならなくても、我が国民の雄飛する舞台はまた実に国史に於ける地理的範囲といふことが出来る」といった主張が注意される。

「民族」がより明確な課題として浮上した理由としては、韓国併合という日本「民族」論や国体論の再編成が求められる事態が発生したことがある。二〇世紀初頭の日本の歴史家における日本「民族」の固有性・特殊性証明とい

う課題を指摘する論者もあるが、黑板固有の文脈でみれば、「従来、国といふものは土地を離れては存在しないと考へてゐたのが、民族があれば茲に国があるといふやうな思想にまでなつて来た」という「民族主義」理解と関連することとは、「国民」「民族」の混用はあるとはいへ、容易に推測されるのである。右の『国史の研究』総説の部の記述は「更訂国史の研究」総説（一九三一年）に引き継がれ、アジアにおける日本の勢力圏拡大に伴う国史研究の範囲拡大に対する「理論的根拠」の提供とされるが、その背後に黑板の「民族主義」があつたことは留意されねばならない。

「民族」の構成要素たる「言語」への着目はエスペラント論と直結しており、象徴的事例は同時期の聖徳太子論にみられる。一九一七年、和田英松が『翰苑』所引の括地志の記載をもとに、冠位十二階の呼称が「国語」で唱えられた可能性を唱えると、黑板は和田論文をもとに「国語尊重」を太子の事蹟の一つとして称揚するようになる。そこではエスペラント論における「外国語崇拜」批判がそのままの形で繰返され、「国語尊重」者としての太子像が強調された。

さて、一九一〇年代の黑板は朝鮮への関心を深め、同地の史蹟保存・歴史編纂への関与を開始したが、こういった営為とエスペラント論はどのような関係にあるのだろうか

か。

黑板の講演「海員とエスペラント」は、日本人は積極的に海上に進出、「太平洋だけは是非日本の占有にし、少くとも欧米の海を互の交通場とするだけの覚悟」が必要と説き、エスペラントはそのためにも有用と説いた。「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」は、「未開野蛮の語が文明人の言語に圧倒せらるゝことは当然」としながら、日本語は使用者数が西洋諸国のそれに比して劣らぬのみか、人口増殖、領土拡張によつて使用者数が拡大しつゝあると評し、外国語を排して日本語のみを使用する「日本語主義」を空論としつゝも、「手近い朝鮮とか台湾とか日本の領土内に確乎日本語を扶植」することは推奨した。黑板が学習の必要を認めるのは英、独、仏、露、西、伊、中国語といった「世界の大国語」であつた。

こうしてみると、黑板エスペラント論は英語を中心とする欧米諸言語への対抗の色彩が濃く、「外国語」を論じつゝ、「我が国に於ける欧洲語問題」という表現を用いたことは象徴的である。弱肉強食の国際言語秩序のなかで、日本がエスペラントを用いて欧米列強の言語的優勢を挫きつゝ、「手近」な地域への日本語「扶植」による勢力拡大が望まれたのである。こうした論理を踏まえれば、黑板が植民地政策に関与し、朝鮮人の日本式姓名への改変と日本語

普及を主張したことも理解できよう。<sup>10)</sup>

第一次世界大戦が終結後、黒板は二つのエスペラント論を発表している。このうち、「改造されたる世界の要求」（一九二〇年）は、戦後の「民族主義」世界は勃発前に生じた「大きな運動、大きな思想」の発現とし、その一つは日露戦争の勝利などによって「欧羅巴全能の思想」を破壊して非西洋諸民族を覚醒させた日本であり、また一つが、「自国語を尊重する」点で「民族主義が宣明せられ」たエスペラントであるという。黒板は、「あの大戦争で欧羅巴の軍国主義、帝国主義が破れて、卒かに民族主義が出たと思ふのは間違」いで、大戦は「従来の欧羅巴全能思想に対する世界的外科療法」とする。

「民族」の構成要素たる「血液」「信仰」「言語」を世界でもっともよく備えた日本は、標準語確立や難解な造語の制限によって「言語」の整備をさらに進めつつ、「血液」「信仰」を同じく出来ない世界においてエスペラントという「言語」によって「精神的国際連盟」を樹立し、「民族としての活動と共に世界の人類としての活動」をなすことが責務だとする。<sup>11)</sup> この論旨は、黒板が発表した最後のエスペラント論「エスペラントに対する感想」（一九二二年）においても繰返された。<sup>12)</sup>

ここに至って、非西洋圏を「覚醒」させた日本とエスペ

ラントの発明とが、ともに大戦後の「民族主義」の淵源として併置された。こうした日露戦争評価は「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」の段階で現われてはいたが、「民族主義」が世界に顕在化するなか、黒板は改めてエスペラントと日本による非西洋圏の「覚醒」を併置し、「民族主義」世界におけるその正当性を示したのである。

これらの論文には、以前示された弱肉強食的国際言語秩序観や、日本語「扶植」論は表面に現われておらず、齋藤は「エスペラントに対する感想」にもとづき、黒板の諸言語尊重や公平な国際関係構築への視座を指摘する。<sup>13)</sup> しかし、前述の日本とエスペラントの併置が暗示するように、黒板における近代日本の歩みへの批判的視座は希薄であるともみられ、齋藤のような理解が成り立つかは疑わしい。一九二〇年代に入り、黒板が朝鮮における史蹟保存・歴史編纂に一層関与していったことは一つの象徴的事例といえよう。<sup>14)</sup>

## おわりに

本稿では、黒板とエスペラントの関係を復元整理するとともに、そのエスペラント論を検討してきた。以下、結論をまとめつつ、結びとしたい。

まず、本稿では従来運動史に依拠してきた黒板とエスペラントとの関係を、同時代の運動資料の悉皆調査にもとづき改めて検証した。黒板は一九〇二年にエスペラントと出会い、一九〇五年から再び関心を深め、一九〇六年から本格的な運動体・日本エスペラント協会を組織しその中核となった。一九〇八年から一九一〇年にかけての洋行の後、衰退した協会を建て直すべく運動を続けたが、多忙による疎遠と個人経営的な協会運営が原因となり、一九一九年に運動から排除された。しかし、エスペラントへの好意は消えず、一九二〇年代以降も運動に協力し続けたのであった。

次に、黒板のエスペラント論である。先行研究では、尹、齋藤によってナショナリズムの存在、特にヨシカワによって反英米的なナショナリズムの一貫性、日本史・日本文化普及の意図が指摘されていたが、本稿の検討によって見えてきたのは、次のような流れである。まず、運動初期においてはナショナリズムにつながる中立性への評価は比較的微弱で、エスペラントの簡易性を生かした対外交流により注目しており、歴史家としては日本史・日本文化の海外普及と同時に、欧米の日本研究への評価と対抗がその意図にあった。しかし、洋行と大逆事件、一次大戦への「民族主義」的理解といった諸要因から、黒板は「自国語尊重」を掲げて英語などの欧米言語の覇権性を批判、エスペラント論を

中立性重視のナショナリスティックな性質に再編した。そのなかで歴史家黒板が発見したのが、「言語」と、それが支える「民族」であり、これらを意識した歴史叙述、それを守った歴史や人物の顕彰が生まれた。その一方、黒板エスペラント論は弱肉強食的な国際言語秩序観や周辺地域への日本語「扶植」論など、対欧米の論理としての色彩が濃く、朝鮮支配への関与と齟齬するものではなかった。やがて一次大戦が終結すると、黒板は「民族主義」的潮流の淵源としてエスペラントと日露戦争による非西洋圏の「覚醒」を併記、戦後世界におけるエスペラントの意義を再強調するに至ったのである。

黒板エスペラント論は、若井敏明の「ナショナリズムとインターナショナリズム」の「同居」という表現で理解することは確かに可能ではあるが、若井が引用した羽仁五郎のような<sup>⑤</sup>、あるいは齋藤のような（理想主義）的理解は妥当とはいえない。黒板にとって、エスペラントは近代日本とその対外政策と矛盾する存在ではなかったものであり、明言こそされていないが、このような姿勢は運動初期においても存在していたとみられよう。

歴史家黒板がエスペラント体験によって発見した「言語」と「民族」は、これ以後の研究や教化的言説に引き継がれていった<sup>⑥</sup>。この点は改めて論じたい。

註

- (1) 黒板の研究動向に関しては、廣木尚「日本近代史学史研究の現状と黒板勝美の位置」（『立教大学日本学研究所年報』一四・一五、二〇一六年）による整理があり、先行研究に関しては同論に譲る。黒板の初の評伝的研究 Lisa Yoshikawa, *Making History Matter: Kuroita Katsumi and the Construction of Imperial Japan*, Harvard University Press Asia Center, 2017, は、この研究動向の集大成と評し得る。同書については、著者による要約であるヨシカワ・リサ「近代日本の国家形成と歴史学 黒板勝美を通じて」（『立教大学日本学研究所年報』前掲号）及び拙稿「書評 YOSHIKAWA, Lisa *Making History Matter: Kuroita Katsumi and the Construction of Imperial Japan*」（『史苑』七八一、二〇一八年）。
- (2) 石井進「黒板勝美」（今谷明他編『20世紀の歴史家たち（2）日本編（下）』（刀水書房、一九九九年）八九〜九四頁）。
- (3) 高木博志は、エスペラント運動との関係を「リベラルなイメージ」の一例とする（『陵墓と文化財の近代』（山川出版社、二〇一〇年）六八頁）。李成市は黒板の植民地支配との関係を問いつつ、「エスペラントの日本代表にもなっており、それほど単純な人ではない」と述べる（大日方純夫「総合討論」（平成二二年度早稲田大学史学会公開シンポジウム「植民地（コロニアリズム）と近代歴史学」）（『史観』一四四、二〇一一年）一五〇頁）。
- (4) 野崎晃市「明治時代の知識人とエスペラント」（『宗教学・比較思想学論集』六、二〇〇三年）、臼井裕之「北一輝の（エスペラント採用論）に見る近代日本の（英語問題）」（『国語問題』）（『スチーチ・コミュニケーション教育』二〇、二〇〇七年）、佐谷眞木人『民俗学・台湾・国際連盟 柳田國男と新渡戸稲造』（講談社、二〇一五年）一〇一〜一〇六頁ほか。
- (5) 丸山二郎「エスペラント語」（黒板博士記念会編『古文化の保存と研究』（同会、一九五三年））四二七頁。
- (6) 羽仁五郎「私の大学」（講談社、一九六六年）一五一頁。
- (7) 若井敏明「平泉澄」（ミネルヴァ書房二〇〇六年）三五頁。
- (8) 尹智煥「1930年代の日本のエスペラント運動と国際関係」（『相関社会科学』一九、二〇〇九年）七八〜七九頁。
- (9) 齊藤智志『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』（法政大学出版局、二〇一五年）一三五頁註(出)。
- (10) Yoshikawa, op.cit (note 1), pp. 79-83, 114-115, 129, 186.
- (11) 一九〇七年から運動に参入し、黒板の下で運動に従事した小坂猶二（一八八八〜一九六九）が執筆した日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編「エスペラント運動史料I」（日本エスペラント運動50周年記念行事委員会、一九五六年）はもともと詳細・正確であり、従来の研究は多くこれに拠る。
- (12) 同記事は長崎の教員・ミスレルの執筆。深堀義文・勝田基平・盛脇保昌・島田素直編『17年間のラブレター 長崎とエスペラント』（日本エスペラント学会、二〇一〇年）一〇頁に同記事の写真が掲載されている。
- (13) 黒板「世界語（エスペラント）」（『読売新聞』一九〇六年五月一六日付朝刊五面）、黒板「エスペラントに対する感想」（『改造』四一八、一九二二年）一〇三〜一〇五頁。
- (14) 堺利彦「エスペラントの話」（『直言』二一八、一九〇五年）



- 三頁。黒板と堺、幸徳秋水は、エスペラント運動開始以前、一九〇四年には交友があった(『平民日記(一)』(川口武彦編『堺利彦全集』三、法律文化社、一九七〇年)三五八、三六一頁、「黒板勝美博士にあてた幸徳秋水の絵葉書」(『日本歴史』二〇六、一九六五年)六五頁)。なお小坂猶二は、「高島米峰、堺枯川、黒板勝美は当時新人 trio と称された親友」と回想する(『運動の統帥黒板博士(一)』(『Verda Sanatorio』二九、一九六五年)四頁)。
- (15) 前掲黒板(註13)「世界語(エスペラント)」、同「世界語(エスペラント) (承前)」(『読売新聞』一九〇六年五月一七日付朝刊五面)。
- (16) 「日本エスペラント協会史(一)」(『日本エスペラント』一一、一九〇六年)三頁。
- (17) 同前。
- (18) 「評議員」(『日本エスペラント』一一二、一九〇六年)一二頁。
- (19) 「大会」(『日本エスペラント』臨時増刊号、一九〇六年)一一頁、「日本エスペラント協会第一回大会」(『同』一一四、一九〇六年)二頁、「日本エスペラント協会第二回大会」(『同』二一九、一九〇七年)五頁。第二回大会では病気のため、出席はしたものの司会は高楠順次郎に譲った。
- (20) 「内国消息」(『日本エスペラント』一一五、一九〇六年)一一頁、「内国消息」(『同』一一七、一九〇七年)一一頁、「内国消息」(『同』一一八、一九〇七年)六頁、「内国消息」(『同』二一三、一九〇七年)一五頁、「内国消息」(『同』二一四、一九〇七年)一六頁。
- (21) 「内国消息」(『日本エスペラント』一一六、一九〇七年)一一頁。

史苑(第七九卷第二号)

- (22) 「内国消息」(『日本エスペラント』二一三、一九〇七年)一五頁。
- (23) 「内国消息」(『日本エスペラント』一一八、一九〇七年)六頁、「内国消息」(『同』二一六、一九〇七年)一三頁、「内国消息」(『同』二一九、一九〇七年)一二頁。
- (24) 上村觀光は、黒板から「エスペラント協会<sup>アソシエーション</sup>の御尽力を仰ぐ」などと記された「エスペラント会特製の画はがき」を受け取っている(閑堂生「諸星消息」(『禅宗』一四二、一九〇七年)七六頁)。また富岡謙蔵は一九〇六年に夫婦で協会に入会したが(『会員名簿(二)』(『日本エスペラント』一一二、一九〇六年)一一頁)、神田喜一郎はこれを黒板の影響とする(『敦煌学五十年』(筑摩書房、一九七〇年)一五四頁)。
- (25) 黒板は洋行前、田中光顕に面会した際にエスペラントについて次のように会話をしたと回想する。「日本には既に立派な国語がある以上他に新に日本語を作る必要はない。が而し、外国人に対し対等の態度を以て交際する時に当つて、其言語に、其文書に世界共通のエスペラントを以てするがよい。現今の日本に於ては之を必要としてゐないのであるが、近き将来に於てその必要に迫られる事であろうと信じてゐるとの趣意をお話すると、伯は夫は洵に面白い意見である、及ばずながら自分も一臂の力を添へようと言はれた。爾来今日に至るまで尠なからざる援助を辱うしてある次第である」(『学芸の守護者』(富田幸次郎編『田中青山伯』(青山書院、一九一七年)五八二頁)。ここには具体的な協会との関係は書かれていないが、一九〇八年三月には田中を名誉会員に迎えたこと報じられており、黒板の勸奨が入会

黒板勝美とエスペラント（渡邊）

- のきつかけとみられる（「本会名誉会員」〔『日本エスペラント』三一・二・三、一九〇八年〕三〇頁）。
- (26) 黒板は、一九〇七年二月に平民社編集局を訪れ、エスペラントの本を翻訳して『平民新聞』の記事に提供したという（『平民日記(三)』前掲川口編(註14) 四〇七頁）。
- (27) 「横浜支部会告」〔『日本エスペラント』二一・三、一九〇七年〕二二頁。「東京支部講習会」「三田講習会」〔同〕二一九、一九〇七年〕二四頁、速水信宗「協会横浜支部の思ひ出その他」〔『La Revuo Orienta』一七・六、一九三六年〕三八頁。
- (28) 「内国消息」〔『日本エスペラント』二一・一、一九〇七年〕二二頁。
- (29) 山鹿泰治「数々の思ひ出」〔『La Revuo Orienta』一七・六、一九三六年〕九二頁。
- (30) 小坂猶二「黒板先生の思出」〔『La Revuo Orienta』二六・一三、一九四七年〕一頁。
- (31) 同大会の様子に関しては、日本政府代表として出席した新村出「チロルの女」ドレスデン日記より（『心』六・四、一九五三年）、同「チロルの女(二)」ドレスデン日記より（『心』六・五、一九五三年）。黒板自身は大会報告の類を残しておらず、長男宛の私信で「エスペラント大会大成功。お父さんはアッチからもコッチからも大持てに持てました」と記したのみである（『黒板勝美先生遺文』〈黒板勝美先生生誕百年記念会、一九七四年〉口絵）。
- (32) 米英での面会は、黒板「西遊二年欧米文明記」〔文芸堂書店、一九一一年〕四、一九三二・二〇一頁。仏でのそれは、同書二五五―二五六頁および「Versailleに於ける黒板博士」〔『日本エスペラント』三一・八、一九〇八年〕。洋行に関するエスペラント関係事蹟に関しては、Yoshikawa, op.cit (note 1), p.105.を参照。
- (33) 前掲丸山(註5) 四二六頁。
- (34) 黒板は後年、「欧羅巴に行く前或必要から「国史の研究」と云ふ本を書いた」と述べている（二十五年の回顧談）〔『筑後史談会二十五年史』(筑後史談会、一九三六年)一八頁〕。
- (35) 前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註11) 一四―一五頁。
- (36) 協会では一九〇九年から組織・規約の変更が計画されていたが、「黒板幹事洋行中なりしを以て暫く其実行を見合せ」という（組織変更並会則改正）〔『日本エスペラント』五一、一九一〇年〕一四頁）。
- (37) 千布利雄「エスペラントと社会主義噴飯すべき誤解」〔『日本エスペラント』三一・八、一九〇八年〕。
- (38) 「黒板博士と世界語」〔『東京朝日新聞』一九一一年九月二四日付朝刊六面〕。
- (39) 「日本エスペラント協会々報」〔『日本エスペラント』五二・三、一九一〇年〕三九―四一頁。同時期の新聞記事によると、黒板は「毎月余り豊でもない収入の中から五十円宛位を割いて協会の維持に要する費用を補つてゐ」という（同前「黒板博士と世界語」）。
- (40) 「会報」〔『日本エスペラント』六一・一、一九一一年〕六頁、前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註11) 一八頁。
- (41) 「蛮カラ列伝(四) 福神漬の黒板博士」〔『東京朝日新聞』一九一一年九月二九日付朝刊五面〕。
- (42) 前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註

11) 二二頁。

- (43) 『日本エスペラント』六一二(一九一一年)二頁。  
(44) 『広島より』(『読売新聞』一九一〇年八月五日付朝刊一面)、『長崎より』(七日)、『同』同年月一八日付朝刊一面)、『鹿児島より』(十三日)、『同』同年月二一日付朝刊一面)、『岡山より』(十八日)、『同』同年月二四日付朝刊二面)。長府での講演は日本歴史地理学会夏期講演会と同時に開催され、夏期講演会参加者の梅原末治が聴講している(『考古学六十年』(平凡社、一九七三年)八頁)。  
(45) 『会報』(『日本エスペラント』六一一、一九一一年)六頁。  
(46) 横須賀エスペラント支部会編『講演集』(同会、一九一四年)二頁。前掲小坂(註14)四頁。  
(47) 『会報』(『日本エスペラント』六一一、一九一一年)六頁。  
(48) 『内国消息』(『日本エスペラント』九一一、一九一四年)七頁。前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註11)二〇頁。  
(49) 『内国消息』(『日本エスペラント』九一一、一九一四年)七頁。  
(50) 前掲丸山(註5)四二五頁。  
(51) 前掲小坂(註30)一頁。  
(52) 『内国消息』(『日本エスペラント』九一一、一九一四年)七頁。同右一頁。  
(53) 森田太三郎『名流漫画』(博文館、一九一二年)九四―九五頁。  
(54) 前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註11)二〇―二二頁。  
(55) 一九一五年一月発行の『中学世界』一八一―一に黒板署名の「エスペラントはどんなものか」「エスペラント大要」が掲載され、以降、一九一六年二月発行の一九一―一二まで断続的にエスペラント講座が掲載されている。  
(56) 『雑報』(『日本エスペラント』一〇―三、一九一五年)三頁。小坂は、「黒板の与えた材料により名文家千布が執筆した」とやや異なる回想も残している(前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註11)、二六頁)。  
(57) 小坂『運動の統帥黒板博士(2)』(『Verda Sanatorio』前掲(註11)一九六五年)八頁。  
(58) 『日本エスペラント第三大会』(『日本エスペラント』一一一五、一九一六年)三頁、『日本エスペラント第四大会』(『同』一一一五、一九一七年)三頁、『日本エスペラント第五大会』(『同』一一一五、一九一八年)二―三頁、『日本エスペラント第六大会』(『同』一四一六、一九一九年)二頁。  
(59) 『横浜支部普及大会』(『日本エスペラント』一一一四、一九一六年)三―四頁、『普及講演会』(『同』一一一四、一九一七年)六頁、『普及講演会雑報』(『同』一一一四、一九一七年)六頁。  
(60) 『東京帝国大学エスペラント会』(『日本エスペラント』一〇―一〇、一九一五年)七頁。  
(61) 前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註11)四五頁。  
(62) 『暮歳忙語』(『日本エスペラント』一三―一二、一九一八年)八頁。  
(63) 『人の半面』(『実業之日本』一九一―一二、一九一六年)四六頁。  
(64) 前掲(註62)『暮歳忙語』八頁、前掲小坂(註57)九頁。  
(65) 前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註11)四五―四六頁。  
(66) 増山太郎編『聖徳太子奉讃会史』(永青文庫、二〇一〇年)

黒板勝美とエスペラント（渡邊）

- 九一九頁。
- (67) 前掲丸山(註5) 四二七頁。
- (68) 前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註11) 四六頁。
- (69) 「重要告示」(『日本エスペラント』一四一八、一九一九年) 一二頁、同前四一頁。
- (70) 前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註11) 四一〜四三頁。
- (71) 「日本エスペラント学会設立次第」(『La Revuo Orienta』一、一九二〇年) 三頁、小坂「日本エスペラント協会を葬る」(『La Revuo Orienta』三〇—三二、一九四九年) 四頁。
- (72) 同前「日本エスペラント学会設立次第」一—三頁、前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註11) 四四—四五頁。
- (73) 「黒板博士を排斥して新たに学会を設立」(『読売新聞』一九一九年二月二日付朝刊五面)。
- (74) 前掲(註71) 「日本エスペラント学会設立次第」三頁、前掲日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編(註11) 四五頁。
- (75) 前掲小坂(註30) 一頁。
- (76) 「日本エスペラント第七回大会」(『La Revuo Orienta』一—〇、一九二〇年) 一頁。
- (77) 「東京学生エスペラント連盟」(『La Revuo Orienta』三—七、一九二二年) 一三頁。
- (78) 「財団法人日本エスペラント学会役員」(『La Revuo Orienta』七—八、一九二六年) 二〇一頁、<sup>1)</sup>「財団法人日本エスペラント学会役員追加」(『同』七—九、一九二六年)

- 二三五頁。
- (79) 『La Revuo Orienta』(一七一—四、一九三六年) 卷末「エスペラント運動後援会設立趣意書」。
- (80) 「学会の日誌(一月)」(『La Revuo Orienta』二〇—三、一九三九年) 三六頁。
- (81) 前掲(註76) 三頁。
- (82) 「第十一回日本エスペラント大会」(『La Revuo Orienta』四—一〇、一九三三年) 一〇頁。
- (83) 「帝国議会へ請願」(『La Revuo Orienta』三—二、一九二二年) 七頁、<sup>2)</sup>「国際補助語「エスペラント」教授調査二閣スル請願」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. A14080815000<sup>3)</sup> 請願 00061100-00324(国立公文書館)。
- (84) 「第三回汎太平洋学術会議に対し我が邦の碩学十八氏エスペラントを会議用語とすべしと抗議す」(『La Revuo Orienta』七—一、一九二六年) 一頁、<sup>4)</sup>「日本語を用ゐよとわが学者連奮起す」(『東京朝日新聞』一九二六年一〇月二二日付夕刊二面)。
- (85) 前掲丸山(註5) 四二七頁。
- (86) S. K 「記念大会漫歩記」(『La Revuo Orienta』一八—二二、一九三七年) 三六頁。なお、同年二月刊行の「婦人之友」三—一二に黒板「ザメンホフ」が掲載されているが、黒板は前年一月以来病床にあり、過去のエスペラント論をもとにした代筆と考えられる。
- (87) 前掲小坂(註30) 一頁。
- (88) 前掲黒板(註13) 「エスペラントに対する感想」一〇四—一〇五頁。
- (89) 前掲黒板(註13) 「世界語(エスペラント)」<sup>5)</sup>「同」エス

- ペラント」に就て」(『教育界』五一一一、一九〇六年)六一頁、同「国際語 에스ペラント(一)」(『東京経済雑誌』一三八〇、一九〇七年)一一一三頁、同「エスペラント」(『明治学報』一一四、一九〇七年)一頁。
- (90) 前掲黒板(註13)「世界語(エスペラント)」、同前「国際語 에스ペラント(一)」一三頁。
- (91) 黒板「国際語 에스ペラント(二)」(『東京経済雑誌』一三八二、一九〇七年)九頁、同「演説抜き書き」(『日本エスペラント』二一二、一九〇七年)四頁。
- (92) 前掲黒板(註15)「世界語 에스ペラント」(承前)、同(註89)「エスペラント」に就て」六一六二頁、同(註89)「エスペラント」四一六頁。
- (93) 前掲黒板(註89)「エスペラント」に就て」六〇頁、同(註89)「国際語 에스ペラント(一)」一四頁、同(註91)「国際語 에스ペラント(二)」一〇一一頁、同(註89)「エスペラント」七頁。
- (94) 前掲黒板(註89)「エスペラント」七頁。
- (95) Yoshikawa, *op.cit* (note 1), p.82. および前掲ヨシカワ(註一)一七頁。
- (96) 前掲野崎(註4)一六一二六頁。
- (97) 黒板・千布によるエスペラント訳教育勅語は、天皇皇后の御真影とともに、『日本エスペラント』二一四(一九〇七年)九一―一頁に掲載された。これを当時逮捕されていた大杉の原稿を掲載するための方便とする解釈があるが(前掲野崎(註4)一四頁)、少なくとも黒板や協会にとって思想的違和感のない行為であつたろう。協会設立翌年の同誌二一八(一九〇七年)一頁に掲載された「エスペラントの十大要義」

の中で、エスペラントは「何等の国家的施設をも妨ぐることなし」とされたのは好例である。

- (98) 前掲黒板(註89)「国際語 에스ペラント(一)」一四頁、同(註91)「国際語 에스ペラント(二)」一〇一一四頁、同(註91)「演説抜き書き」四頁。
- (99) 同前「国際語 에스ペラント(一)」一四頁。
- (100) 前掲黒板(註15)「世界語(エスペラント)」(承前)。
- (101) 安田敏朗「帝国日本の言語編制」(世織書房、一九九七年)四六一五〇頁。
- (102) 黒板の談話によって『直言』に掲載された堺利彦「エスペラント語の話」はエスペラントの対外交流における利便性を評価するものであったが、これは同紙前号に「階級闘争」における「万国労働者」の「疎通」を図ってフランス社会党がエスペラントを導入したという記事が掲載されたことを受けたものであった(『万国語 에스ペラント』『直言』二一六、一九〇五年)三頁)。
- (103) Yoshikawa, *op.cit* (note 1), p.82.
- (104) 前掲黒板(註89)「エスペラント」に就て」一六〇頁。
- (105) 黒板『国史の研究』(文会堂書店、一九〇八年)二二七頁。
- (106) 黒板「現今史学界の欠点(史論と素養)」(『江湖文学』三、一八九七年)五七―六四頁。
- (107) 平藤喜久子「神話学と日本の神々」(弘文堂、二〇〇四年)一一―二四頁。
- (108) この時期の黒板の神話関係の業績については Yoshikawa, *op.cit* (note 1), pp.72-74.
- (109) 松村武雄(一九〇七年東京帝大入學)は「国史科のかの便腹のK博士」が、「マクス・ミュラー流の神話解釈の流を酌

黒板勝美とエスペラント（渡邊）

- んであるところの書物」を帝大図書館から借覧していたと回想しているが、『神話学者の手記』（培風館、一九四九年）二〇頁、これは黒板を指しているよう。
- (110) 黒板「日本古文書様式論」（『虚心文集』六（吉川弘文館、一九四〇年）一一頁ほか。
- (111) 前掲黒板（註105）一三二―二五頁。
- (112) 『日本エスペラント』一一八（一九〇七年）三頁「時事」欄には、ローマ字ひろめ会がローマ字綴り方の意見を募集した際、黒板が協会を代表して「ローマ字綴り方は全然エスペラントに依らざるべからざる旨」を答申したとある。「ローマ字ひろめ会の建議について」（『教育界』六一三、一九〇七年）はおそらくこの出来事と関連しているよう。
- (113) 「羅馬字実施策（六）」（『東京朝日新聞』一九一二年七月四日付朝刊四頁）ではローマ字国字論、「海員とエスペラント」（前掲横須賀エスペラント支部会編（註46）所収）二頁では「文字の改良」への賛意が示された。
- (114) 前掲黒板（註89）「エスペラント」に就て「六三頁。
- (115) 黒板「世界平和の言語的解決」（『国民雑誌』二一七、一九一一年）。
- (116) 黒板「将来の国字問題（三）エスペラントと日本」（『読売新聞』一九一〇年一〇月三日付別刷二面）、同「将来の世界語エスペラント」（『実業之世界』七一―二、一九一〇年）。
- (117) 前掲黒板（註113）「海員とエスペラント」八一―五頁。
- (118) 黒板「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」（『太陽』二一一―三、一九一五年）、「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ（承前）」（『同』二一―四、同年）。
- (119) 同前「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」一一二頁。
- (120) 前掲黒板（註32）二頁。
- (121) 前掲黒板（註113）「海員とエスペラント」九頁。
- (122) 李成市「コロニアリズムと近代歴史学」（寺内威太郎編他編『植民地主義と歴史学』（刀水書房、二〇〇四年）八〇―八三頁、前掲齊藤（註9）、一八一―一八六頁および二一八―二三五頁。著名な「史蹟遺物に関する意見書」（『史学雑誌』二三―五、一九一二年）は、G. Baldwin: *The Care of Ancient Monuments* 1905 を「下敷きにし」、それを換骨奪胎したものだ」との指摘もある（田中琢「遺跡遺物に関する保護原則の確立過程」（小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編『考古学論考』（平凡社、一九八二年）七七六頁および七八二頁註（23））。
- (123) 黒板「歐洲に於ける支那考古学の研究」（『漢学』一一一、一九一〇年）。
- (124) 黒板は同会にて国立文書館設立の必要を唱え（第二回読史会記事」（『史学雑誌』二四―一、一九一三年）九八―九九頁）、朝河貫一「日本封建土地制度の起源」論文を批評するなど（第廿四回読史会」（『史学雑誌』二六―三、一九一五年）一〇〇―一〇一頁、特色ある活動を示した）。
- (125) 前掲李（註122）八〇―八三頁ほか。
- (126) 前掲黒板（註32）四四―一四四二頁。
- (127) 同前、七六五頁。
- (128) 黒板「曾遊の土耳其を回想して老帝国の末路を愴む」（『海之世界』七一―一、一九一三年）二二頁。
- (129) Yoshikawa, *op. cit* (note 1), pp. 114-115. および前掲ヨシカワ（註一）一八頁。
- (130) Yoshikawa, *op. cit* (note 1), p. 129.

(131) 黒板「戦後の世界を支配すべき民族は何れぞ」(『実業之日本』一七一―一二二、一九一四年) 三七―三八頁。

(132) 川澄哲夫「解説」(同編『英語教育論争史』(大修館書店、一九七八年) 一四三―一五二頁。

(133) 遠藤吉三郎「英領的日本」(『大日本』二―一、一九一五年) 五八―六四頁。

(134) 前掲黒板(註118)「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ(承前)」九三頁に、「或人は此の有様を見て、日本は漸次英領の状態に進みつゝあるのだと憤慨して居る」とあるのは遠藤の前掲論文を指すとみて間違いない。

(135) 高橋「鉄道界に対する余の希望」(同『日本に於ける外国語問題』(日本エスペラント協会、一九一六年) 三頁。

(136) 同前「日本に於ける外国語問題」冒頭の黒板「小序」四頁。

(137) 黒板「国史の研究」総説の部(文会堂書店、一九一三年) 二八九―二九〇頁。

(138) 同前、二八〇―二八一頁。

(139) 小熊英二『単一民族神話の起源』(新曜社、一九九五年) 一三六―一五一頁ほか。

(140) 小路田泰直『日本史の思想』(柏書房、一九九七年) 一〇三―一二七頁ほか、同『邪馬台国』と日本人』(平凡社『平凡社新書』、二〇〇一年) 五四―五九頁、同『邪馬台国論争の超克―白鳥・津田史学からの脱却』(井上章一編『学問をしばるもの』(思文閣出版、二〇一七年) 九二―九三頁。

(141) 前掲黒板(註118)「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」一〇六頁。

(142) 箱石大「近代日本史料学と朝鮮総督府の朝鮮史編纂事業」(佐藤信・藤田覚編『前近代の日本列島と朝鮮半島』(山川出

版社、二〇〇七年) 二五一頁。

(143) 和田英松「翰苑に見えたる冠位十二階の称呼」(『史学雑誌』二八―八、一九一七年) 四五―四七頁。

(144) 黒板「明治天皇と聖徳太子」(『明治聖徳記念学会紀要』一〇、一九一八年) 四五頁、同『聖徳太子小観』(聖徳太子一千三百年御忌奉賛会、一九一八年) 一九―二三頁ほか。

(145) 前掲黒板(註118)「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」一〇九頁。

(146) 前掲黒板(註118)「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ(承前)」九九頁。

(147) 同前、九八頁。

(148) 同前、九九頁。

(149) 黒板「同化の第一義は鮮人の改名に在り」(『朝鮮公論』六一八、一九一八年) 二九―三二頁。同論文は、民間における朝鮮人に対する日本名付与論の「最初の例」とされる(水野直樹『創氏改名』(岩波書店『岩波新書』、二〇〇八年) 三三頁)。一般的に、黒板の「日鮮同祖」論による朝鮮支配の正当化は知られているが、黒板の国際言語秩序観もこのような政策提言を後押ししていたとみられる。

(150) 黒板「改造されたる世界の要求」(『国語教育』五一―一、一九二〇年) 五九―六二頁。

(151) 前掲黒板(註13)「エスペラントに対する感想」一〇五一―一〇九頁。

(152) 前掲齊藤(註9) 二三五頁註(1)。

(153) 前掲李(註122) 七三―八〇頁。

(154) 羽仁は、黒板のエスペラント論を紹介しつつ、7「国史の研究」の国史とは国民の歴史を意味し、この国民は国際的

黒板勝美とエス・ペラント（渡邊）

平等の平和に生きるものであった」と高く評価する（前掲羽仁（註6）一五一頁）。

（155）一九二〇年以降の黒板による「民族」を意識した史蹟保存論については、前掲齋藤（註9）二〇八一―二〇九頁で言及されている。

### 付記

本稿は、二〇一七年度一般財団法人日本エス・ペラント協会研究発表会（二〇一七年一月四日、於神奈川県立かながわ労働プラザ）における報告を基にしたものである。資料の閲覧等に関し、同協会の多大な御理解・御協力を得た。記して謝意を表す。

（早稲田大学大学院文学研究科博士課程）



## Kuroita Katsumi and Esperanto.

史苑  
(第七九卷第二号)

WATANABE, Tsuyoshi

It has been known for a long time that Kuroita's ideas about Esperanto had a connection with nationalism. However, the prior research deals with only a part of Kuroita's ideas about Esperanto, and nobody explored yet Kuroita and Esperanto's rapport in details.

For these reasons, this article explores as exhaustively as possible the rapport between Kuroita and Esperanto, especially Kuroita's ideas about Esperanto.

Kuroita first learned about Esperanto in 1902 and started Esperanto movement in 1906. He was the central figure of Esperanto movement until his exclusion from this movement in 1919. Even after that, Kuroita continued to evaluate positively Esperanto, and supported the movement.

From 1906 to 1908 Kuroita further emphasized the simplicity of Esperanto. From 1913 to 1915, in his Esperanto's views, he came to assert that Japanese language must be protected from foreign languages, idea which strengthened nationalistic character of his theories. There, he also clarified his resistance against the West. When World War I ended and the League of Nations was established, he came to evaluate the Japanese state and Esperanto as resources of the current nationalistic(minzoku) world.

Kuroita's ideas about Esperanto consistently included nationalism, however the degree was different depending on the time. Likewise, he did not try to apply the logic of ethnic equality included in Esperanto to East Asia.